

# 中村哲さんを忘れない (福岡小学生新聞Wecan! vol.32—P7)

福岡の偉人

## 中村哲さんを忘れない —アフガン復興に人生を捧げた人—



昆虫をこよなく愛した幼少期

中村さんは、1946年に福岡市で生まれました。お父さんとお母さんのふるさとの北九州市若松区で幼い頃を過ごし、小学2年生で古賀市に引っ越ししました。そこで決定的な出会いがありました。同級生のお父さんが蝶を集めていて、その影響で昆虫が大好きになりました。フーブルの「昆虫記」を読んでは、野山を盛んに歩き、小さな虫の無限大の世界に夢中になりました。

医師への道

虫の研究者になりました。中村さんは、農学部で昆虫学に進学したかったものの、「趣味で大学なんて」と厳格なお父さんに許してもらえないと九州大学の医学部に進みました。卒業後は、日本の病院で精神科医として働き、そして1978年、好きな蝶や昆虫が見たいという理由で、登山隊の医師として初めてパキスタンや隣国のアフガニスタンを訪れ、「こんなところで働きたい」と思うようになり、当時パキスタンのベシヤワールの病院では、ハンセン病の医師が不足していました。今では特効薬もありますが、かつて不治の病と恐れられた差別をされてきた病気で、「誰も行かない所こそ自分が必要」とされる中村さんはベシヤワールで働くことになりました。

昨年12月4日、アフガニスタンで医師の中村哲さんが銃撃され、亡くなりました。73歳でした。福岡市で開かれたお別れ会には、全国各地から5000名もの人が集まり、中村さんが好きだったバラの花が、静かに手向けられました。日本から遠く離れたアフガニスタンという国で、35年にわたり、現地の人々の立場に立ち、現地の人と一緒に汗を流してきた中村さん。福岡出身の偉大な先輩は、どんな人だったのでしょうか。

医者、井戸を掘る



戦乱の真つただ中、中村さんはパキスタン人やアフガン難民のハンセン病の治療を続けました。多いときには一日に70名もの診察をしました。患者の多くが山奥の病院がない地域の出身だったので、アフガニスタンの山間部などに、10カ所の診療所を開設し、貧しい人たちの病気を治しました。

そんな中、2000年、アフガニスタンは大干ばつに襲われます。農地は砂漠になり、次々と村が消えました。そして何日もかけて診療所に行けず、列を待つ間に息を引き取りました。「水と食べ物さえあれば、助けられなかった小さな命を目の前で見てきた中村さんは、井戸を掘ることにしました。その数は1600カ所にもなりました。しか

し飲み水だけでは、食料不足と栄養失調は解決できませんでした。



百の診療所より一本の用水路を

「飢えや渴きは薬では治せない」と、中村さんは全長25キロの用水路を建設することにしました。一人で土木を学び、自ら設計図を書きました。現地の人が造りやすいように、江戸時代の技術を取り入れ、朝倉市の山田堰をモデルにしました。元の農民を集めて、一緒に石運びをし、重機にも乗り、7年かけて用水路を完成させました。



「もう人は住めない」と言われていた砂漠化した土地は、水が届くことで、あっという間に緑がよみがえりました。1万6500ヘクタールが農地になり、田植えができ、麦や米、オレインジまでが実る大地となりました。市場も復活し、難民や兵隊になっていった人は次々と村に戻り、65万人が暮らせるようになりました。一本の用水路が命をつなぎ、アフガニスタンの人々に平和をもたらしました。

人々のたつた二つの願いのために

人の幸せは、「一日に三度のご飯を食べること」「ふるさとで家族と一緒に穏やかに暮らせること」



考えていた中村さん。かつて穀物自給率が93%もあった豊かなアフガニスタンの姿を取り戻すことを願っていました。現地の人たちの手で用水路を造るようにと訓練所を設立し、住民の心のよりどころとなるモスクや学校も建てました。

「道で倒れている人がいたら手を差し伸べる。それは普通のこと。生前中村さんが語っていた言葉です。常に現地の人の立場に立ち、目の前にある困難に対し、行動を起こすことよって道を切り開いてきた中村さん。祖母からの「率先して弱い者をかばえ」という教えを守ってきました。

まだまだ活動は続くと周囲に話していた中村さんは、道半ばにして銃弾に倒れました。日本やアフガニスタンだけでなく、世界中の人がその死を悲しみました。皆さんが住むこの福岡に、偉大な先輩がいたことをどうか忘れないでいてください。

